

大 学 院 特 別 講 義

(医 歯 学 先 端 研 究 特 論)

下記の通り特別講義を開催いたしますので御案内申し上げます。
多数の御来聴を歓迎いたします。

記

演 題：椎間板変性抑制のための細胞移植療法

講 師：東海大学大学院医学研究科 研究科長

東海大学医学部外科学系整形外科学 教授

持田 譲治先生

日 時：平成23年10月14日(金) 18:30～20:30

場 所：共用講義室1 (MDタワー 2階)

講演要旨：

我が国の腰痛患者は700から800万人に及ぶと言われ、その原因の半数が椎間板変性による一次性、あるいは二次性病態である。著しく進行した有症状の椎間板変性では当該椎間を固定する術式が選ばれ、この手術によって腰痛や腰部不安定性が解消する。しかし固定術によって脊椎の3つの機能(体重の支持、神経のコンテナー、関節)の内、関節機能が破綻し、固定椎間隣接部の椎間板変性が新たに進行することが少数ではない。従って、椎間板変性の進行抑制や再生への試みは、脊椎の機能温存の上で重要である。椎間板変性抑制には色々な方法があるが、東海大学では、真に治療が必要となるのは通常に加齢変化の状態ではなく、中等度の変性状態の椎間板であると考え、細胞移植療法を選択した。元々存在する椎間板髄核細胞、あるいは骨髄間葉系幹細胞(椎間板様細胞の導出)の2つを移植細胞元とし、1994年以来、基礎研究、橋渡し研究を継続してきた。細胞学的に poor である椎間板髄核細胞を移植する為に、体外での活性化を考え、骨髄間葉系幹細胞との細胞間接着を伴う共培養法を確立し、小、中、大型動物での *in vitro*, *in vivo* の検討を経て、2008年1月に『厚生労働省ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針』の審査委員会の承認を得た。2009年から臨床研究を開始し、全11症例への移植術を今夏に終了し、経過観察中である。このプロジェクトで経験した基礎研究から橋渡し研究を経て臨床研究に至る色々な出来事を紹介し、また次に予定されている骨髄間葉系幹細胞そのものによる椎間板細胞の導出についても紹介する。

担当講座：運動器外科学

連 絡 先：内線 5953 (宗田)